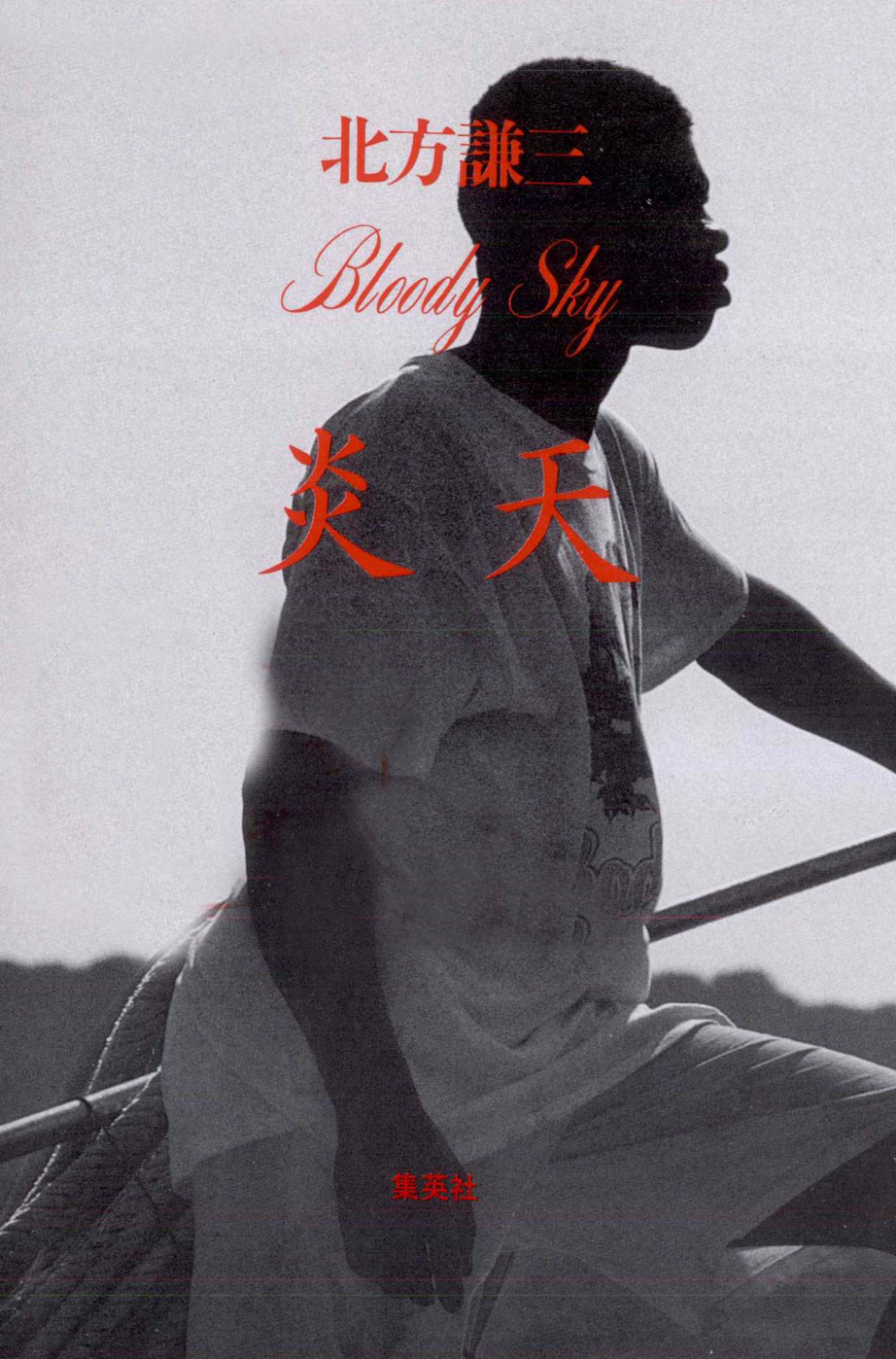


三謙方北
Bloody Sky

天炎





三謙北方

Bloody Sky

天 炎

集英社

初出誌

「小説すばる」一九九二年七月号～九月号

装丁 安彦勝博

写真 著者

炎天

一九九二年一月二五日 第一刷発行

著者 北方謙三

発行者 若菜 正

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
郵便番号 一〇一―五〇

編集部 (〇三) 三二三〇一六一〇〇
販売部 (〇三) 三二三〇一六三九三

制作部 (〇三) 三二三〇一六〇八〇
印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

© 1992 K.KITAKATA

Printed in Japan ISBN4-08-772876-5 C0093

炎^{えん}

天^{てん}

第一章

1

まずい、としか思えなかった。

四時間かけて牛の尻尾を煮こみ、三時間かけて玉ネギを炒め、かなりの量のワインと香料を入れたのに、どういうわけか酸味の強いソースにしかない。

ワインのせいだろうと思えるのだが、いくら時間をかけてソースを煮つめても、酸味は消えないのだった。

自分が台所で料理をする姿など、船に乗っていたころは想像したことさえなかった。陸^{おか}でひとりで暮すようになって、サラダや目玉焼やオムレツなど、簡単な料理を手早く作るようにはなった。

なにしろ、私の住いの下は、家庭料理ふうのレストランなのだ。大家の水町三佐子が、ひとりだけで好きなのだろう、と私は思っていた。つまり、作るものに愛情がある。まずははずはなかった。

時間と手間をかけた料理をしようと思いついたのに、きつかけらしいきつかけはなかった。

私にボクシングを教えてくれた、長坂という男が、引退して食べ物屋をはじめた。私鉄沿線の、駅のそばの小さな店で、私のところから車で十分ほどだ。

長坂の作る料理がうまかった。二十九歳と十一カ月まで、体重を増やさないために、まともな食料を胃に入れたことがなかったのではないか、と思える男が作った料理が、下のレストランほどではないにしろ、なかなかのものなのだ。

私にも作れるだろう、と思わせるものが長坂にはあった。開店の第一号のお客が私だったのだが、スパゲティをうまく皿に盛ることもできず、二、三皿の外に垂れさがったものを出したのだ。

そのスパゲティも意外にまじくはなかったが、パンチの打ち方しか知らない男にできて、私にできないはずはないと思った。

私は、鍋の中のソースを掻き回した。

はじめから、オックスティルのシチューなどに挑戦したのが、よくなかったのかもしれない。それでも、はじめたのだ。

肉汁と玉ネギを主成分とするソースは、すでに鍋の三分の一ほどまで煮詰っている。それでも、酸味は消えていかない。

作り方を訊けば、水町三佐子は熱心に教えてくれるだろう。しかしそれなら、下へ行ってビーフシチューを食った方がましだった。長坂に訊こうとも思わない。

長坂は一度だけ、ウェルター級の日本チャンピオンになった。チャンピオンであった期間は、わずかにひと月だった。防衛戦に破れたのではなく、タイトルを返上してしまったのだ。チャンピオンになることで、長坂はボクサーとしては完全に燃え尽きたのだろう。

私が、長坂のいたジムに通っていたのは、タイトルを返上するまでの数カ月だった。

チャイムが鳴った。

外国からの、小さな小包だった。

ガスの火を消し、私は包みを解いた。かつて、よく同じ船に乗った、船員仲間からだ。三宅という

その甲板^{ボースン}長は、もう五十を超えていて、私の親父のような存在だった。

入っていたのは、インディオのものらしい敷物で、テールプルセクターにでもなりそうな小さな布だった。ほかに手袋がひとつ。それは何度か使っただけの、まだ新しいもので、一航神尾と、私の名が端に書かれていた。つまり私のもので、下船する時どこかに忘れていったものに違いない。分厚い革で、甲板作業のために支給されるものだ。

三宅が、なぜそんなものを送ってきたのか、どうしても理由がわからなかった。敷物は手のこんだもので、細かい刺繍が施してある。

気紛れで、こんなことをやるタイプではなかった。ベラクルスという、メキシコの港町から送ったようだ。

ガスに火を入れ、私はまた鍋を掻き回した。

自分で料理をやって、ひとつだけいいことがある。時間をかけて煮つめようとしたりする時、それをそのまま考える時間にも当てられるということだ。

ソースが煮詰って、濡れた泥のようになったとしても、三宅がなぜ私にプレゼントなどをする気になったのか、わかりそうもなかった。支給品の手袋など、甲板以外では、ほとんど使い道も思いつかない。

夕方になっている。

私は火を止め、鍋に蓋をした。やはりソースから酸味は消えない。ワインの酸味に違いなかった。

煙草を一本喫い、私は下のレストランへ降りて行った。その日その日のメニューがあるだけで、別のものは註文できない。作ったものがなくなると、コーヒーしか飲めない。常連客が何人かいて、下手をすると食い損うことがあった。夕方、早目に降りていけば、まず大丈夫なのだ。

「今夜のメニューは、ビーフシチューか」

中年の客がいるテーブルを見て、私は呟いた。メニューはひとつだから、ほかのテーブルに出てい
るものを見れば、なにを食わされるかわかってしまうのだ。

あまりの皮肉に、食欲を失いかけた。私は朝からシチューにとりかかり、それを夕食にすることさ
えできなかったのだ。

ポタージュと、胡麻のたっぷり入った和風ドレッシングのサラダ。

「シチューが、お気に召さないみたいね、神尾さんは」

「別に、そんなことはないが」

「うんざりという顔で、テーブルについたわよ」

「俺の、今日一日にうんざりしてただけさ」

「そういえば、きのう秋月さんが見えたわ」

「いきなり訪ねてきてもいる暇な男、と思われたわけだ」

「コーヒーを飲みながら、一時間以上もお待ちになってたけど」

急ぐ用事であれば、真夜中でも電話をしてくるだろう。昨夜は、一時には部屋に戻っていた。

私は、テーブルのビーフシチューに鼻を近づけた。その仕草を見て、水町三佐子が笑い声をあげる。
「やっぱり、ソースの主成分は、フォンド・ボーと玉ネギとワインだな。香料がなにかってどこか」

「どうしたの、神尾さん？」

「なにごとも、分析するのが探偵の性癖でね。最近、口に入れるものまで分析しちゃう」

「いろんな材料が融合して、別のものになってしまふ。それを、料理というのよ」

「じゃ、分析はできない？」

「できるわよ。ただ、食べる側には、そんなことをする意味はないってことね」

食べる側ではなく、作る側の関心だという言葉、私は途中で呑みこんだ。いまのところ、料理を

しているということを、誰にも知られたくはなかった。

水町三佐子のシチューには、どこにも酸味などなかった。そのくせ、ワインの香りと味は濃厚にするのだ。途中から、分析するのは忘れて、皿を舐めたように平らげていた。

「神尾さんの食べ方は、いつ見ても気持がいいわね。人間には、食べる側と作る側と二通りあるような気がするわ。神尾さんは、食べる側ね。旺盛に食べて、作った人間を喜ばせるタイプよ」

「ママは？」

「あたしは、両方かな」

水町三佐子が、肥った臍をゆすって笑った。四十三歳になっているはずだが、肥った臍とあどけない表情が、年齢より若く見せていた。

「俊から、手紙は？」

水町三佐子が、黒人との間に産んだ、二十一歳の青年だった。数カ月前に合衆国に渡り、いまはサンディエゴにいる。しばらく父の国で生きてみるという俊を、水町三佐子は止めなかった。

「二度だけね。住むところが見つかった時と、仕事が見つかった時。それで安心してると思ってるのかもしれないわ」

「大丈夫だよ、あいつは」

私と俊は、西アフリカのある国で、ひとりの女を捜し、守ろうとした。俊の愛した女が、西アフリカから日本に来ていて、同じ肌の色が二人を結びつけたのかもしれない。その女が、トラブルに巻きこまれ、母国へ帰ったのである。俊がそれを追い、さらに私が母親に頼まれて俊を追った。その国で、私と俊は、女を守ろうとして守りきれず、死なせた。俊の方がずっと深い傷を受けたにしろ、私もその傷の一部は共有している。

「先生は、ただ見てろとおっしゃるんだけど。男の人生が、母親の心配ぐらいで変わることはないって

ね」

「俺も、そう思うよ」

先生というのは、八木辰造という食わせ者の弁護士で、船から降りた私を、私立探偵稼業に引っぱりこんだ張本人だった。いまでも私は、八木法律事務所とは特別の契約を結んでいて、ほかの仕事よりは優先することになっている。

「あいつは、父親に会いたがってるわけじゃないと思う。だから、捜してもいいいき」

「そうは思うんだけど」

私は腰をあげた。水町三佐子に息子の心配をさせると、際限がない。

部屋には、シチューのソースの匂いが漂っていた。食事のあと、さすがに台所に立とうという気にはなれない。

ベッドに寝そべって、音楽を聴いた。テレビやビデオは、好きではなかった。船に乗っている時から、そうだ。

私が聴くのは、ジャズのスタンダード・ナンバーか、ポルトガルのファドだった。この二つは、似ていると私は思っていた。

マリア・アルマンダという歌手の、ファドをかけた。悪くはない。ちょっと小意気で、どこかにジャンソンの雰囲気も漂っている。アマリア・ロドリゲスには、過剰に悲壮なところ、切なさすぎるところがあって、時々衝動的にそれを聴き続けたりする以外は、あまりかけなかった。

いつの間にか、まどろんでいた。

電話のベルで、眼が醒めた。

「なんとかしてくれんかね、若旦那を。酔い潰れちまってるんだ。俺が送っていてもいいんだが、若旦那がどこに住んでるかも、考えてみると知らなかった」

「酔い潰れてるって」

長坂の店は、九時半で終りだ。私は、時計に眼をやった。十時になろうとしている。

「こんな時間に、もう潰れちまってるのか、秋月は」

「店に来た時、もうかなり酔ってたよ。ウイスキーを飲みはじめて、二時間で潰れたね。うちは食堂で、酒場じゃないと言ってやっただが、もう耳もなくなっちゃってね」

「おまえらしくないぞ。放り出せよ。酔いが醒めりゃ、自分で帰るさ」

「そう思ったんだがね。泣いてるんだよ、若旦那。泣き上戸じゃなかったし、ちよつと気になる涙でもあるんだ」

「泣いてるか」

私が迎えに行くしかなさそうだった。断れば、長坂は朝まで秋月に付き合うだろう。引退してから、必要以上にやさしい男になった。長坂のところは、借金を返すために、朝食も昼食も営業している。

「車か、やつは？」

「いや」

「わかったよ。十分ぐらいで行く」

私はベッドを出、革ジャンパーをひっかけると、ガレージへ降りていった。

エンジンをかけ、しばらく暖機してやる。その間に、幌をあげた。気難しいエンジンだったが、私はこの濃紺のマセラーティ・スパイダーが気に入っていた。雨の日以外は冬でも幌をあげるの、フル・オープン姿が美しく見えるからだ。自分の女を、できるだけ美しく装わせたい、という男の心境に似ているのかもしれない。

水温計が動きはじめてから、私は車を出した。

長坂の店まで、突っ走れば七、八分だが、駅前細い道に一方通行が多く、結局は十分かかってし

まうのだった。

外装だけ新しくした、小さな店である。これを買うために、いくら借金したか知らない。三十歳直前に、日本チャンピオンに輝いた男の、眼に見える勲章だった。ただ長坂は、見えない勲章を、ひとつだけ擲んだ。それは、誰もが持てる勲章ではない。

秋月は、店の奥のテーブルで眠っているようだった。ネクタイは緩み、イタリー製のスーツはしみだらけになっている。

「悪いな、酔っ払いの面倒まで看させて」

長坂にでなく、女房の方に私は言った。店をはじめてから、女房はやつれが目立っていた。朝食から営業し、アパートには子供が二人いる。そろそろ限界だろう、と私は長坂に言ったことがあった。

「勘定は？」

「飲んだだけだからな。それも、自分のキープしているウイスキーをだ」

長坂が肩を疎めている。

私は秋月の upper body を起こし、スーツの内ポケットに手を突っこんで、財布を抜いた。一万円札を二枚出し、元に戻す。

「一枚でも多すぎる。困るな」

「これに見合った額のウイスキーを、新しく入れてくれ。それでいいだろう。キープしてたやつは、空けちまったみたいだし」

一万円札は三枚しか入っていなかった。十枚入っていれば、五枚抜いたところだ。札の代りに、カードが何枚も入っている財布。やはり、若旦那だ。

私は、秋月の躰を担ぎあげた。身長は百七十センチはあるのに、体重は五十六キロというところだ。一年前の話だが、いまま大して変わってはいないだろう。

私と秋月は、長坂が現役のころ、横須賀のボクシング・ジムに通っていた。ジムの会長が秋月を評価していたのは、体重についてだけである。

「事情を、訊いてやってくれないか、修さん」

「なんで泣いてたか、だな。ママの胸に抱かれて泣くわけにはいかないう事情が、なにかあったんだろう」

「頼むよ」

私は長坂の潰れた鼻に眼をやり、頷いた。

助手席に放りこんだ。

「神尾さん」

エンジンをかけようとした時、不意に秋月が言った。

「俺は、酔ってないよ」

きのうの夜、下のレストランで私を待っていたという話を、ふと思い出した。

「しばらく、走るぜ。風で頭がはつきりする」

「俺は、酔っちゃいない」

潰れてはいない。しかし、酔ってはいる。私はエンジンをかけ、車を出した。

2

陰気な店だった。

騒々しく音楽がかかっているが、客の顔が陰気で、おまけにカウンターの下のバーテンの顔まで陰気だった。

ビールを頼んだ。バーテンは注ぎもせず、栓を抜いた瓶を、カウンターに音をたてて置いた。ポリウームをあげた音楽に消されて、客の話声はまったく聞えない。

「若い客が、多いのかね？」

「まあね」

バーテンが、面倒臭そうに言った。この店では、私は若くない部類に入るらしい。

「暴走族が集まる店ってのは、ほんとなんだな」

「お客さん、警察の旦那ですか？」

「違う」

「そうか、どうもね、警察が眼をつけたらしくてね。やつら、悪いことをしてるわけじゃねえのに、なにかあると調べられたりする。族ってわけでもありませんよ。昔、族にいたなんてのはいます」

「みんな、大人か」

「二十二、三歳ですがね」

私は、一杯目のビールを空け、二杯目を注いだ。いきなり、ひとりが立ちあがり、仲間らしい男に掴みかかった。

発火寸前のところに、私は飛びこんだようだった。陰気と感じたのは、そのせいかもしれない。それにしても、子供の喧嘩だった。蒼白な顔で掴み合っているが、パンチなど叩いているという感じだ。テーブルのグラスが床に落ちて割れた。

「やめねえか、てめえら」

音楽よりも、大きな声だった。二人の動きが一瞬止まった。それからまた掴み合う。

「酔いを醒ましてこい、真也」

いつの間にかカウンターを出ていたバーテンが、ひとりの襟首を掴んで持ちあげた。

「悪口を言ったの言わねえのって、女みてえな喧嘩をするんじゃない」

真也と呼ばれた男が、襟首を掴まれたまま外に放り出された。

店の中は、それで静かになった。

「高校の先生だね、まるで」

「別に、お客さんに迷惑かけたわけじゃねえでしょう」

「それはそうだ。驚いたがね」

私は、二杯目のビールも飲み干していた。

女の客は、四人いた。みんな似たような年頃で、みんな酔っているようだ。

「あそこにいる、女の子たちは？」

「みんな、お客さんですよ」

「誰かを呼んで、奢れないかと思ってね」

「連れがいる女を、ひっかけようってんですかい？」

私は三杯目のビールを飲んだ。バーテンが煙草に火をつけた。さっき放り出されたばかりの男が、入ってきて席へ戻った。バーテンはなにも言おうとしない。

「実は、人を捜してる。美幸って女の子だね。この店に、よく来てるって話だが」

バーテンが、じっと私を見つめた。しばらく眼をそらそうとしない。

「おかしいか、俺が人を捜しちゃ」

「なんの用事で？」

「それを、あんたに言う必要はないと思うが」

「帰れよ」

「なぜ」

「ここは、俺の店だからさ」

バーテンが、煙草を消した。私の襟首を掴んで、放り出す気になったのかもしれない。私は、カウンターから腰をあげた。

「勘定は？」

「金は、いらねえよ」

私は頷き、出口ではなく、客がたむろしている奥の席の方へ行った。

「美幸というのは？」

女の子のひとりが、弾かれたように私の方を見た。

「話がある。外で待ってるよ」

言って、私はドアにむかって歩いた。バーテンがカウンターから出てこようとしていたが、私が店を出る方が早かった。

店の外で、待っていた。出てきたのは、客の男の四人だった。全部で六人の男客がいたから、二人は店に残っている。

「おまえ、なんだよ？」

「おまえらこそ、なんだ。四人で人を取り囲むなんて、穏やかじゃないね？」

「帰んなよ」

「なぜ？」

「顔が気に食わねえんだよ」

次の瞬間、パンチが来ていた。かわすほどのこともなかった。腹で受ける。腹筋で弾き返したようになった。

「こんな目に遭うんだよ」